

先生がおしえてくれないこと

「いい景色でしょ」

情事の現場がいつも高層階なのは、おそらくこの男の趣味なのだ。

高い場所というのは、昔から権力者が好むものだという。そうだとするならば、ここは男の好みそのものだった。

ましてや、今この部屋に誘われているのは、過去に縛られている哀れな虜囚だった。平静を装っているが、真っ青になった横顔は、貧血を起こす寸前の面持ちだったはずだ。

巖徒局長は同伴した御剣をさりげなくエスコートして、あらかじめ自分が取っておいたこの部屋にそっと連れてきた。ダブルのベッドが備え付けられていても、部屋の狭さをまったく感じないホテルの一室は、ちょうど角になっているせいか、部屋の二面が窓だった。

カーテンは上品なベージュ。それが半分ほど引かれていて窓の下には、光り輝くビルの明かり。洪水のように溢れこぼれる光は、まだ夜が浅いことを二人に知らしめている。

この部屋にたどり着くまでに、すでに軽くアルコールを口にしていた。ホテルの最上階のバーカウンターであけたカクテルは、階下の明かりを映してキラキラと輝いていたはずだった。最高のサービスとは言わないが、バーとして最低限のレベルはクリアしている。最近はどこもバーテンのレベルが下がったことだと思いつながら、巖徒は御剣の肩に手を置いた。そのまま、部屋へ向かう動く個室へ入る——エレベーターが苦手な御剣は、バーに向かう途中ですでに顔色が悪くなっていた。青くなる横顔に手を伸ばせば、びくりと震えて目を伏せる。

冷たくなった手を握って、そっと肩に身を寄せさせれば、驚くほど素直に従ってくるのには、さすがに巖徒も驚いた。吐き出された息が熱いのはわかっているが、今日の御剣はどこか人寂しい風情が強くて、隙が多い。

こんな子に熱意をこもった瞳を向けられて、どうして頭を撫でずにいられるんだろうね？

そんなことを思い出しながら、巖徒は濡れた髪をタオルで拭いた。

「何か飲む？」

窓辺に立ち尽くしていた御剣の背後に近づく。

「先にシヤワー使わせてもらったよ、御剣ちゃん。

どう？ なんか飲む？」

御剣はそれほど体格が劣っているというわけではない。だが、八分の一を外国の血で形作られている巖徒爽徒は、御剣よりかなり上背があり、骨格そのものが御剣とは違っているように思われた。普段重厚なスーツで覆われた胸板は厚く、年齢を感じさせない若々しい肉体を持っている。

学生時代は柔道で全国へ行ったこともあるという武勇伝を聞いたのも、そういえばそれはいつかの寝物語ではなかったか。

「いえ、…結構、です」

御剣の指先が震えている。

巖徒は懸命にカーテンを握り締める御剣の手を自分の手のひらで覆った。びくりと震える指先をも包み込んで、そつと指を布地から引き剥がす。

「震えてるね？」

「……………そんな、ことは…」

背中から腰に手を回す。ジャケットも脱いでいない御剣の、上着の下からそつと手を入れれば、驚いたように肩が跳ねた。

すでにこうやって、身を開くのは初めてではなかった。なのに、いつまでたつても、御剣はその行為に慣れない乙女のようなそぶりを見せるのだ。いつも耐えているような、何かを堪えているかのような、そんな仕草を見せてくる。

そこがまた、たまらなく男をそそるということを、果たしてこの青年は気がついてるのだろうか？

「シヤワー、浴びようか？」

そういいながら、御剣のうなじを探る。カーテンは半分しか閉めていないので、窓に自分たちの姿がぼんやりと反射していた。

御剣の耳たぶを齧る。そこからかあつと体が熱くなってきたのが、よくわかった。

「どうしたの？」

「いえ、…自分で、脱ぎます、から…」

耳たぶにキスと甘噛みを繰り返しながら、巖徒はジャケットの中に手を入れた。ベストの下から下半

身を探る…ボトムsの布地の上から、ぎゅつと薄い尻たぶを掴んだ。

「ひっ…!」

御剣は低く声を上げて、思わず窓ガラスに手を叩いてしまう。がくと膝が崩れそうになるのを押しさえ込んで、巖徒は足の間に自分の膝を押し込んだ。入れた膝で、股間をそつと押し上げる。

「あ…!」

吐く息で窓が白くなるのが見えた。

巖徒はそのまま手のひらを滑らせて、御剣の、引き締まった薄い肉のついた尻の狭間へ、指を伸ばした。ぐつと力を込めると、また御剣は息を吞んで、耳を一層赤くした。

「あ、あ、あ…、…あああ…!」

「駄目じゃない——御剣ちゃん。一人で気分出したって、駄目でしょ——？ 準備してくれたのは、ありがたいけどさ。ね？」

「あ——、…っ、…は——、…っは…:…はい…」

ぐいっと指先を、尻の谷間に押し込んだ。背中に力が入って、窓ガラスに爪を立てるのが見

える。少し深爪気味だった。

「バーではあんなに真っ赤になっちゃって…かわいそうに、バーテンさんが困ってたよ。キミの色香に迷っちゃったじゃない？ 顔色が変わってたね」

「そんな…ことは、…」

「まあ、そういうの興味なくても、御剣ちゃんはねえ…結構、その気になる男、多いと思うけどね。…:…まあ、ボクも、そのうちの一人、なんだけどさ」

「巖徒…:…局長…」

「そう」

巖徒はすつと指の力を抜いた。ほつとした御剣が力を抜いて窓ガラスにもたれかかる。だが、足の間に入れた自分の太腿で、形を変え始めた股間を押し上げれば、すぐに背中に力が入った。

「御剣ちゃんってそんなにお酒弱かったっけ？ 結構強いんじゃないかって印象があったんだけど」

「…:…それは、…」

御剣は言いよどんで唇を噛んだ。巖徒はわかかって言っているのだ、今の御剣の状態がどんなものであるのかを知っているから。

御剣が巖徒局長と、身を重なるようになったのは、検事になってしばらくしてからのことだった。正確にいつなのかはわかっていないが、そんなことに正鵠を記しても意味はない。

巖徒が御剣に興味を抱いたのはいつなのか、御剣は正確には知らなかった。ただ、この男と師との間に流れる一種微妙な空気が、彼らをただの知り合い以上の関係だったことを暗に示していた。巖徒局長は狩魔検事にながしかの執着があったのだろう。

それがどんなものであれ、彼が御剣に興味を抱き、身を望み、それによってながしかの益を得ることができるのなら——それは御剣にとっても、それほど悪くはないことではないのか、と思っていた。

そう——始めのうちは。

巖徒は御剣を抱きしめる。背中を撫でる。頭を撫でる。腕を取る。腰を抱く。耳を噛む。口付けはしたことがないが、狩魔検事よりはずっと、御剣の肌に触れ、声をかけてくれた。

肌に触れられることを、いったいいつから自分は

されていなかったのか。

どれほど自分が人の手に、人のぬくもりに餓えていたのか。それを御剣が知ったのはこの男のせいだった。巖徒の手は厚く、大きく、指が太く、——とても暖かい。

初めて頭を撫でられたとき、もう子供ではないといきり立つより先に、ひどく懐かしい気がして驚いたものだ。

肩を抱く手の平の熱さがいつまでも体に残っていて——自分がどれほどそれに餓えていたのか、ようやく気がついたのだ。

狩魔検事は御剣にその飢えをすでに教えていた。だが、彼は決して、それを満たすことはしなかった——飢えていること——それこそが、もっとも強い力になることを誰よりも知っているのが、狩魔検事という男だったと、御剣はまだ知らずにいた。

結構、酷いことするよね、狩魔ちゃんはさ。

巖徒はそう嘯きながら、御剣に欲しがっているものを惜しみなく与えた。

御剣は、まだ子供なのだ。

ただ一人で暗闇に置き去りにされた子供、閉ざされた扉の鍵を開ける方法を知らず、その扉の向こう

で彼を助けてくれる父親の手を、いつまでもいつまでも待っている子供——その父の手は、すでにこの世にないことを知っているのに知らない子供——扉の鍵を開く方法を知らない子供。

彼の経歴を知ったときに、巖徒はいくばくかの感慨を覚えずにいらなかった。

D1六号事件は、巖徒にとっても印象的な事件だった。当時、巖徒はすでに地方の警察の署長をいくつか経験していて、数年のうちに中央に戻ってくるのではないと噂されていたところだった。その巖徒と同じ大学の二年後輩が、その事件の指揮を取ることになったのだ。

同時に、巖徒ともっとも激しく出世を争っていた男がその事件の責任者となった。彼はその事件の責任をとって一時期閑職に追いやられてしまい、そのせいで巖徒は上の職に抜擢された。

事件は予想以上に大きく警察上層部の処分を引き起こし、警察機構に相当な傷を残したまま、未解決

で終結した。

失った信頼を回復するのに、どれだけボクが苦労したと思ってるの——と、考えたことがなかったとは言わないが、しかしあの事件がなかったら、巖徒の出世はまた少し、違ったものになっていたのも間違いない。

そういう意味では、ひどく間接的にだが——巖徒は御剣に、いや、御剣の父に感謝しているのだ。

あの事件にはかなり多くの謎があり、それはほとんどが初動捜査にあたった捜査官の、事件の仮説が間違っていたことに起因していた。

ボクだったらこんなことはしないなあ——そう思いながら、事件の概要を眺めたことも、一度や二度ではない。

不確定要素のひとつが、被害者の連れていた子供であった御剣侍だった。

子供がいることで、事件の概要の推測は大きく揺らぐ。事件の意味が見えにくくなる——子供は大人にとって、最大の行動の理由にもなるが、また同じように最大の障害物にもなりうるのだ。